

## 身の回りの自然とかかわって遊ぶ

山形大学附属幼稚園（山形県山形市）

[3・4・5歳児]

### ウサギとの出会い～かかわり

昨年度まで園で飼っていたウサギが高齢で亡くなり、悲しい別れを経験した子どもたちに、生き物とのかかわりをもたせたいという保育者の思いから、今春、新たにウサギを飼うことにした。初めは思い思いに名前を付けて呼んでいたため、子どもたちから、「みんなで名前を付けようよ」という提案が出され、“ココア”に決定。

#### “ココア”に餌やり（3歳児・春）

園に来たばかりの頃は、ケージの中で警戒して隠れて出てこないココアを、「出てこない…」と、子どもたちはじっと見つめる。6月になって、クローバーを見せると近寄って来て喜んで食べるようになり、子どもたちは、反応してくれるココアを嬉しそうに見る。畑で栽培した小松菜が、美味しそうだったので、ココアに食べさせることにする。喜んで食べる様子を見て、「もっとあげたい！」と畑に採りに行き、たくさんの種類の中から小松菜だけを選んでココアに与える。自分たちで育てた小松菜だけに、喜びも倍増。ココアがより近い存在になっていった。

#### “ココア”の家作り（5歳児・秋）

A児の「もっとココアちゃんと遊べる場所がないかな？」との訴えから、家を作ることになる。自分たちで大きな板を探して来て釘打ちを始めたが、大きい板を組み合わせるのは難しいので、角材に薄い板を打ち付けて梯子状の物を作り、それを組み合わせて柵を作ることを保育者が提案する。長い期間かかって出来上がったが、ココアが板の隙間から何度も逃げてしまう。板と板の間を狭くしたり、柵を高くしたりして修正を重ねるうちに、子どもたちのココアへの気持ちも、より近付いていく。「ここに草を持って来ると、お腹をすかせないで済むよね」「ここに糞を敷いてあげると、気持ちいいだろうな」など、ココアの様子になって考えるようになり、子どもにとってもココアにとっても心地よい居場所が出来上がっていった。



### 砂の料理（4歳児・春）

A児とB児が、園庭でお家ごっこをしている。そこにC児と保育者が加わり、4人でナベやフライパンを持って来て料理をする。子どもたちが砂を入れてかき混ぜていたのので、保育者が「どんな料理？」と聞くと、「砂のお料理」という返事が返ってくる。砂以外にも園庭にある草や木の枝などを取り入れて、素材のイメージを広げて欲しいと思い、保育者が「この野菜、入れてみる？」と近くのヨモギの葉をちぎり渡した。「いいね」と葉を混ぜて嬉しそうなA児。ヨモギの葉を混ぜ合わせることで素材のイメージが広がり、汲んで来た水を入れたり、料理の材料になりそうな木の枝や桜の種などを入れたりし始める。「これは肉だよ。豆も入ってるんだ」とイメージが広がり、様々な素材を見立てて楽しんだ。



### バーベキューごっこ（5歳児・秋）

A児、B児が落ち葉を肉に見立ててバーベキューごっこをしていた。保育者が、さらに肉らしく見える木の皮を使うことで、本物を意識して見立てて遊べるのではないかと考え、「お肉、少なくなってきたでしょ。一緒に取りに行こう」と、丸太から剥がした木の皮が置いてある作業場に、A児を誘う。A児は、「いいねえ」と言って、籠いっぱいに入れて持ち帰る。しばらくして様子を見に行くと、石と小枝を入れたバケツの上に金網を置いて“かまど”に見立て、金網には肉に見立てた木の皮が並べられていた。



### みどころ

自然とかかわって遊ぶ中で生き物に親しみをもったり、自然素材のイメージを広げたりして欲しいという保育者の願いが、援助から伝わってきます。ウサギのためにこうしてあげたいという思いを巡らせたり、様々な自然素材から質感を感じたりすることが、さらに自然に目を向けたりかかわったりするきっかけになっています。身近な自然環境である園庭を、遊びや生活に取り込み活かすことで、子どもたちの「科学する心」が刺激され、遊びが豊かに展開していくことが期待できます。